

仮面ライダーアル フォース～正逆の物語

紋章

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

二十年前、日本のある場所に両親と親戚が何者かに殺された少年がいた。

少年は当時世界に絶望していた。そんな時少年は一人の男性に引き取られた。少年はその時男性に渴を入れられ、もう一度世界と向き合う決意をした。その後の二十年を少年は世界を見ることと両親の死の理由を考えて過ごした。

そして現在。少年は青年に変わり、確かな意思と力を手に取り自分が住んでいる場所を守るために奔走する。

目次

世界の終わりと愚者の始まり 前編

1

世界の終わりと愚者の始まり 後編

24

始まりの世代 前編

49

世界の終わりと愚者の始まり 前編

今から二十年も前のことだ。世界各国の政府機関に向けて突如Mr. Xと名乗る人物からある電子メールが送られて来た。

そのメールにはこう書かれていた。

『30分後に貴殿方の国を侵略させて貰います。抵抗の意志が無いのなら速やかに武器を捨て全面降伏してもらいたい。尚、抵抗した場合は……死を覚悟して貰おう』

これを見た世界各国の政府機関のほとんどは子供のイタズラか冗談と思い笑いながら電子メールを削除してしまった。

それから30分後、各国の政府機関にポルトガル、南アフリカ共和国、チリの三か国

との連絡が途絶えたことが伝えられた。

唯一最後まで連絡が繋がっていたポルトガルからの最後の連絡では

「ば、化け物、化け物が!？」

と言う悲鳴染みた声が聞こえただけだった。

そしてまるで見計らったかの様なタイミングで政府機関に再び Mr. X からのメールが届いた。

『私の忠告を聞いてくださらなかったことは残念で仕方ありません。ですが、もう一度だけ皆さんにチャンスを差し上げます。次は全面降伏をしていることを私は願っています』

このメールを読み終わると連絡が途絶えた三か国の付近の国はすぐに警戒体制に入りその国が出せるだけの兵力を出し国境付近で待ち構えていた。

その数十分後、待ち構えていた警官や軍隊は全員地面に倒れて死んでいた。中には奇

妙な死に方をしてゐる者もいた。

顔がガラスの様になつて死んでゐる者や、体がまるで酸で溶けたかの様な者、何故か灰に被さるかの様に落ちてゐる軍服などがその場所には転がつていた。

その侵略から二年の月日が流れ、生き残つたのは兵力の豊富で人員も多かつたロシア、アメリカ。そして「謎の戦力」を保有してゐた日本の三か国だけになつてしまつてゐた。

だがその生き残つてゐた三か国の一つのロシアがMr. X達に落とされたと聞くと当時の日本政府はすぐにMr. Xに降伏しアメリカを見捨てた。

アメリカの当時、そして最後の大統領はせめて一矢でも報いたいと思ひ軍の戦闘機でMr. X達の軍団に神風特攻を仕掛けたが、Mr. Xの軍団の一割しか削ることができなかつた。それを見たアメリカ軍はどうとうMr. Xに降伏宣言を出した。

真つ先に降伏した日本政府は「謎の戦力」と呼ばれてゐた存在達をMr. Xに売り渡

し、せめて日本に慈悲を求めた結果。滋賀県を境にした東北、関東、中部地方のみ今まで通りの生活を約束され、滋賀県よりも関西側の住人を全て東側に移住させることにしたのだった。

この後Mr. Xは自分の軍団を財団Xと名付け、侵略した土地で生き残った住民はそのまま在住させ、その土地の名前を全て財団X領と名付け統一してしまった。

そして約一年前には日本人は日本の東側だけでなく、財団X領と日本の領地を行き来することが許可されるほどの信頼を得ていた。

だがそう言った平和が長続きすることは無かった。ある時財団X領にて財団Xの構成員が銃で殺されるといふ事件が起こった。犯人は東日本の人間だった。財団Xはこれに激怒し、東日本への侵略を再開し始めた。

しかし、日本政府は万が一のことを考えてある技術の開発を科学者と、財団Xに売り渡さなかった【謎の戦力】に頼んでいた。当時はまだ名前などは無かったが、その技術

の特徴は人間の精神的な力で外部に影響を及ぼすことだった。その媒体として当時の科学者達は色々な物を試した。結果最も相性が良かったのはタロットカードだった。

日本政府はそのカードを使い財団Xの攻撃の防衛に当たっていた。

この間に当時の天皇と総理大臣は財団X日本支部のトップに今回の件を自分たちの命と引き換えに見逃してくれるように頼み込んでいた。日本支部のトップはすぐにMr. Xに電話をかけ指示を伺った。

Mr. Xはその願いを聞き届け今回のみ特例で許すことを認めた。

その日、当時の天皇と総理大臣は処刑をされた。それにより財団Xからの侵略は無くなったが、同時に信頼も無くなり日本人は再び東日本に幽閉された様な生活になってしまった。

そして一年後名前の改まった新東京都に住むある悲劇を背負った男性を起点にこの物語は始まる。

新東京都

一年前、天皇と総理大臣が同時に死亡し一時的に首都たる東京都にも混乱が生じた。しかし、次の天皇と総理大臣は既に決定しており混乱はすぐに収まった。そして、新政府は新たに始めると言うことで東京都の名前を改め新東京都と名付けた。

そしてこの新東京都の現在最も注目されている物と言えば一つしか無い。それは一年前の防衛時にも活躍した技術でその後フォースマインドと言う名前で公式発表された。そして政府は万が一の防衛手段としてそれを世間にも配った。だが、最近では大半の人が娯楽として利用するようになった。とは言え自衛隊にもこれは配られていて、本来の目的としてもちゃんと使われていた。

そしてここはそんなフォースマインドに必要なタロットカード別名アルカナカードを取り扱っている店の一つ「ワイルド」である。

「おじちゃん、アルカナカード頂戴!!」

「駄目だ」

「えー何で何で?!?!」

「喧しい。理由なら一つだ……ほれ」

カウンタールにいる頬に縦傷の入った屈強そうな45歳位のスキンヘッド男性は騒いでる茶髪の男の子に店の壁を指差した。そこにはこう書かれていた。

『12歳以下の子供へのアルカナカードの販売はしておりません欲しい方は他の店に行くか年をとるのを待ちください』

「という訳だ。諦めな坊主」

「うー!!」

そう言われた子供は男性に謎の奇声を浴びせ始めた。男性が鬱陶しそうな顔をしていると、入り口のドアが開けられ男性にとっては見慣れた顔が入ってきた。

「よお、一週間ぶりだな黒霊」

「ああ、久しぶりだなマスター」

入り口のドアからカウンターまで歩いてきたのは黒い髪をストレートにしている紺色のジャケット、内側に黒のシャツとジーンズを着ており、腕に特殊な形の腕輪をつけ、腰にカードが入るようなケースをつけた25歳位の男性だった。男性……黒霊優世はカウンターまで来ると騒いでいる子供を一瞥するとマスターに向き直った。

「この子は？」

「アルカナカードが欲しいんだと。全く最近はこの子供でもアルカナカードを求めに来ると来たもんだ。世も末だな」

「確かにな。今のご時世、子供でもアルカナカードと実力さえあれば大会でお金を稼げる時代になったからな。おい、その子供」

マスターとの会話を切り上げると優世は子供に声をかけた。呼ばれた子供は奇声をあげながら優世の方を向いた。

「うー!!」

「アルカナカードが何故欲しい？理由を言ってみろ。理由次第ではこの堅物マスターを説得してやつても構わないぞ」

「え、ホント!?!」

「おい。何を勝手に約束しているんだ」

「理由を聞く位なら構わないだろマスター?」

優世にそう言われたマスターは難しい顔をした後に言う。

「まあ、聞くだけならいいだろう」

「礼を言おう。ほら、今のを聞いていただろう。さあ、理由を言ってみろ」

「う、うん!僕のお母さんが倒れちゃってその治療費にええーと、確か100万円位必要で……」

「100万円だと?」

子供にそう言ったのは意外なことに聞くだけと言ったマスターだった。

「う、うん」

「ふむ……それは嘘だろうな」

「え!？」

「俺も同意件だ。それほどの治療費を必要とするなら、最低限入院手続きの一つ位はするものだ」

「どういうこと？」

二人の会話を聞くだけではどういうことか分からなかったのか子供は二人にどういふことか聞いた。

「お前の母親は100万円も無くても治療が出来るということだ」

マスターがそう言うとき子供は興奮しながら再度質問をする。

「ほ、本当なのおじちゃん!？」

「ああ、本当だ。これも何かの縁だ。お前の家の住所を教えろ。俺の知り合いの医者に向かわせてやる」

「う、う、ありがとうおじちゃん!!!」

マスターが携帯を取り出して子供にそう聞くと子供は泣きながらマスターにお礼を言った。

数分後マスターの呼んだ医者と一緒に子供は「ワイルド」を去った。

「全く……おい、黒霊。何だその何か言いたげな顔は」

マスターが言うように優世は何かを言いたげな表情でマスターを見ている。そして口を開いた。

「いやなに。マスターは相変わらずのツンデレだと思ってるな」

「よし、喧嘩を売ってるってことでいいんだな？」

「マスターとの喧嘩は流石に遠慮させて貰おう」

優世がすぐに引くのを見て興が冷めたのかマスターは別のことを話し出す。

「そうだ。黒霊最近の大会での稼ぎはどうなんだ？」

「ボチボチだな。最近は相手も色々工夫してくるのでね」

「お前が言うとお肉にも聞こえるがな。む、どうやらタロットバトルが始まるようだな」

マスターがそう言う様に店の中央に置いてあるリングを挟んで二人の男性が睨み合っていた。

「今日こそ積年の恨み晴らさせてもらおうぞ!!」

「また負け戦になると思うのによくやるねえ」

叫んだ赤い髪の男性が自分の場所にあるアーケードゲームのような物にタロットカードを現代的なデザインにしたもの、アルカナカードを台の上に置いた。カードには女性とライオンの絵、更に上部にはⅧと書かれていた。

もう一人の金髪のロン毛男は皇帝の絵、上部にはⅣと書かれたアルカナカードを台座に置いた。

するとそれぞれの目の前のリングに女性の顔の形をした拘束具を口に付けたライオンと王冠を付けた男性が現れた。

「スキャンしたアルカナカードに記された絵と正位置の恩恵を宿した自分の精神体を召喚し戦わせるタロットバトル……最近ではそれに必要なアルカナカードも増えてきたものだな」

「全くだ。挙げ句のはてにアルカナカードに細工をする連中も出てきやがった。……そもそもあのカードは最初は防衛目的だったってのによ」

「アルカナカードの細工は法律違反だと言うのにどうしてそこまでやるのだろうな」
「他の店とかと相談した時の会話では裏で闇金が動いていると話も聞くが……お前はどう思う」

力と皇帝のタロットバトルを眺めながら二人はそんな会話をしていた。話の途中でマスターは悲しそうな顔をしていた。

マスターがどう思うか聞いてくると優世はすぐに答えを出す。

「強さの誇示だろうな」

「強さの誇示か？」

「ああ。今アルカナカードを持っている多くは20年前の戦争当時、幼いか生まれていない者ばかりだ。そんな中自分達でも戦える力を手にすれば誇示したくなるのは人間ならよくあることだろう」

優世の発言を聞くとマスターは顔には出さないが安心したかのような雰囲気です。話します。

「あのガキがここまで成長するとはな」

「感謝してるさ。幼少時に父と母、親戚を全員殺された俺を引き取ってくれた貴方には、ね。今の俺が居るのも貴方のお陰ですし」

「別に俺は感謝されるようなことはしてないがな」

「俺からすれば感謝されるようなことですよ」

二人がそんな会話をしていると丁度試合が終わったのか歓声と共に金髪のロン毛男がアルカナカードを回収して大手を振りながら機械から離れていた。不意に優世は時計を見ると時間がかなりたっていていることに気付いた。

「そういえば……すまん。この後用事があるのを思い出した」

「そうか。なら俺に構わず行きな。また来るのを待つてるさ」

「ありがとうマスター。では」

そう言つて優世は店を出ていった。

「……………」

一人の女性が春の穏やかな日差しを浴びながら昼頃の駅前時計の下で誰かを待っていた。その女性は長い銀髪をストリートにしており黒曜石の様な黒い目で空を見ていた。するとチャラチャラした集団がやって来てその中のリーダー格と思われる男が話しかけてきた。

「おつそこの彼女、お一人？ だったら俺達と一緒に来ない？」

声をかけられた女性は男達を一瞥すると再び空を見て話し出す。

「貴方達と話すことはありません。それに私、人を待っているの」

「えー、そんなこと言わずにさ……」

「ッ!!」

「ぐへっ!？」

リーダー格の男が強引に女性の手を掴むと女性は男の手を捻りあげ、その男の胴体を持っていた鞆を叩きつけた。

「て、てめえリーダーにこんなことをして只で済むと思ってるのかこらあ!!」

「身ぐるみ剥いで路地裏に捨ててやるぜヒヤッハー!!」

他の男達がそのようなことを女性に言うが、女性に怯えなどは見られずただめんどくさそうにしていた。

「てめえ、ぶっ殺確定だぞこらあ!!」

「おいそこの世紀末不良集団」

リーダー格の男は女性から離れ、襲いかかろうとするが後ろから肩を叩かれてそちらの方に振り替える。

「アア!？」

「彼女が何をしたのかは知らんが俺も彼女に用事が合つてな。ここは帰って貰えないか?」

「嘗めたこと言ってるじゃねえよ!!」

不良の一人が襲いかかるが声をかけてきた男性……優世は不良の攻撃をかわしてカ

ウンターとばかりに胴体に膝蹴りを叩き込んだ。それをくらった不良は堪らずその場に座り込んだ。

「まだ、やるか?」

「ちっ!!お前ら帰るぞ」

リーダー格の男はその光景を見て頭が冷えたのか仲間を引き連れて去って行った。不良達が去ると女性は優世に近づき開口一番綺麗な声で怒鳴った。

「遅い!!約束の時間から30分も遅刻ってどういうことですか優世!!」

「それは……悪い事をしたな聖華」

「全く……ここほん。この地区に引越してきた私に町の案内をすと言ったのは貴方ですよね?」

怒鳴り散らし終えたのか、一言咳き込むと丁寧な口調で言った。

改めて彼女の事を紹介しよう。長い銀髪に黒曜石の様な眼、そして上は白を中心とした服に下は薄い白のロングスカートの彼女は白雪聖華（しらゆきせい か）。優世がマスターに引き取られてからの幼なじみで以来中学までは同じ学校に通っていたが、親の転勤で高校から別の地区に引越してしまい、今日再びこの地区に引越してきたのである。また、彼女は護身術を親から学んでおり自衛だけなら成人男性10人と戦っても返り討ちにすることができる。

「そうだな。ならば遅れた分、敬意をつくして案内させて貰おう」
「それは楽しみですね」

「そう言うのと優世は聖華の手を取りエスコートするかの様に町の要所を説明していった。スーパー、コンビニ、デパート等々生活に必要な店に続いてこの地区の名所である高台を案内した。」

それらを案内し終えると二人は道を歩いて「ワイルド」に向かっていた。聖華はその途中で今まで見てきた場所の感想を優世に話していた。

「ここはスーパーの商品が多いんですね。デパート並みに商品があるスーパーなんて初めて見ましたよ」

「確かにこのスーパーの商品の多さは異常だろうな。デパートよりもスーパーの方が近い主婦やサラリーマンなんかは基本的にここで買い物をしていくそうだからな。まあ、各言う私もその一人なのだがね」

「そう言えば貴方は職について無かったのですかね。何でしたら……紹介しましょうか？」

聖華の両親はどちらも企業の部長以上の地位についており、その両親のツテで仕事を紹介しようかと聞いてきたのである。

「遠慮させて貰おう。別段、今の生活でも困ってはいないからな」

「そうですか。それにしても、今やスーパーにもアルカナカードが置かれるようになったんですね」

そう言った時の聖華の表情は気にくわれないと言った感じが簡単に読み取れた。

「聖華はあれが嫌いなのか？」

「ええ、嫌いですよ。あれのせいで最近では学歴に関係なく、アルカナカードを持つていて使いこなれば、就職出来る世の中になりましたからね。真面目に勉強してきた人達が可哀想ですよ」

「成る程。確かにそう言う見方もあるな、とは言えその話はまた今度にしよう。目的地に着いたぞ」

会話に夢中になっていたのか二人は気づくと「ワイルド」の前に立っていた。

「では少しここで待っていてくれ。マスターに発行して貰ったこの町での君の証明書とアパートの鍵を貰ってくる」

「分かりました。今度はあまり待たせないで下さいよ」

「出来るだけ気をつけては置こう」

乾いた笑みと共にそう言うのと優世は「ワイルド」に入って行った。聖華は近くの屋根の下にあるベンチに座った。

「それにしても優世は昔から変わりませんね。無口と言うか、クールと言いますか……」

あれは？」

聖華が優世について一人呟いていると不意に近くを通った赤い髪の男性が目に入った。男性は周囲の物を蹴りながら歩いていた。時折「糞……」や「何で……ないんだ」と呟きながら路地裏に入っていた。聖華は知らないが男性は先程金髪の男性に負けていた人物であった。

「あの男性、あのまま行くと犯罪に走りそうですね……仕方ありません。注意しに行きましようかね」

よく言えば面倒見がいい、悪く言えばお節焼きな性格の聖華はその男性の雰囲気を見て危ういと思ったのか、注意をするためにベンチから立ち上がって路地裏に歩いて行った。

「確かあの男性は……むっ？」

路地裏はそれなりに広い形になっており、十字路の様な形をしていた。聖華はそこで

先程の男性を探していたが、よく分からない音と男性の声がかえって咄嗟に横路に
なっている壁の陰に隠れた。

「俺は……弱い。弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、
弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い、弱い」

声がかえった方では聖華を探していた男性が壊れた人形のように弱いと呟いていた。
そして聖華にはその男の声だけでなくまるで硝子が割れる様な音が連続して聞こえて
きていた。

「この硝子が割れる様な音……不快ですね」

聞こえてくるその不快な音に思わず頭を押さえるがそれでどうにかなるわけも無
かったが唐突にその音が消えた。

「今の音は一体……そう言えば」

音が消えるのと同じくして男性の声も聞こえなくなっていた。それが気になった聖
華は思いきつて壁の陰から出てきて声がかえっていた方向を向いた。

「なっ、あれは一体何ですか!?!いえ、それよりも!!」

そこには先程の男性が気絶しており、更にその男性の陰から何かが出てきていた。そ
れを見た聖華はその何かよりも男性の安否が気になり、思わず男性に近づき脈を確認し
た。

「ふう、どうやら命に別状はありませんね」

男性の脈拍は正常でそれが分かった聖華は安心した。しかし、聖華がそうしている間に陰から出てきていた何かは完全に陰から出てきてしまっていた。

「ここが生ある世界か……そしてこれが俺の体、か」

陰から出てきたのは獅子の顔に金色の体躯、白銀の毛に身を包み額の辺りに不気味な字でⅧと書かれた存在だった。その背中をみただけで危険だと思つた聖華は男性を庇うように前に出て構えた。

「貴方は……何者ですか？」

聖華がそう聞くと相手は背中を向けたまま言った。

「俺は……ハヌマーン。この世界ではそう名乗らせて貰おう。それよりも俺に声をかける貴様は何者……」

ハヌマーンが聖華の顔を見ようと振り向くとその目は汚らわしい物を見る様な目に変わっていた。

「女……だと。最強の俺の前に女が居ることは許さぬっ!!」

ハヌマーンが地面に手を翳すと地面から骨で出来た長剣が現れた。それを手に取るとハヌマーンは一步で聖華に近づき、骨の剣を降り下ろした。

「くっ……!!」

避けることも考えたがそれでは後ろの男性に骨の剣が当たってしまう。そう考えた聖華は覚悟を決めて骨の剣を自分の身体で受け止めようとして目を瞑った。

「……………」

しかし幾ら待っても骨の剣が降り下ろされないことに気づいた聖華は恐る恐ると言った感じで目を開いた。

「ぐうっ!!」

「あれは……優世?」

そこには何故か手首を押さえているハヌマーン、そして地面に突き刺さっている愚者のタロットカード。

その更に奥ではまるでカードを投げた様なポーズをしている優世が立っていた。

「やれやれ、俺は待っていてくれと言ったはずだがな。まあ、いい。大丈夫か聖華」

「貴方のお陰で大丈夫でしたよ優世」

聖華が無事なのを確認すると優世は手の痛みが収まったハヌマーンを見た。

「その額の文字……そしてそこに倒れている人影。成る程。お前は獣型シャドウの力タ
イプと言った所か」

それを言われたハヌマーンは驚愕の眼差しになった。

「俺達のことを知っているだと……貴様何者だ?」

「俺か？俺は黒霊優世。そして……」

優世は表が半分ずつ白と黒色になっているタロットカード……ゼロカードを腕輪……アルカナリーダーに翳した。するとアルカナリーダーがベルト形態……バックルモードに変わりそれを腰に巻き付けた。

その時のアルカナリーダーは前面に機械的な色をした長方形のカードを入れる様な場所があり、その上部の部分には0と描かれ、更には上にはカードをスラッシュするような窪みがあった。側面部には一番右からIと続き一番左にはXXと描かれてあった。

「変身」

そこまですると優世は腰につけてあったケースがアルカナリーダーと合体したアルカナケースを開きそこから旅人の絵が描かれ上部と下部に0と書かれ、裏面が普通のアルカナカードと違い黒色の愚者のアルカナカードを取り出すとそれをアルカナリーダーのカードを入れる場所フォースチェッカーに入れた。

『アルカナ・THE・FOOL・set up』

カードを入れるとフォースチェッカーが自動的に回転を始め、優世の上空に愚者のタロットカードと同じ絵、形をしたエネルギーが現れ降ってきた。

それを通った優世の体に変化していった。顔は黒を基調とした姿に頭部からは道化師などの帽子についてる二本の耳頭巾を灰色にした物がついており、目は赤い複眼と

なっている。

胴体から足にかけては白色を基本とした姿に背中から灰色のマントをつけていた。右腰にアルカナケースを左腰には黒色のサブイバルナイフ……ナイフ・ザ・フールが装備されていた。

フォースチエツカーの回転が終わると同時に変化も終わりエネルギーは優世の体を通りすぎていった。

フォースチエツカーの縁の色は白色に変わり、アルカナカード部分も先程の絵に0が重なった様な姿に変わっていた。

それを見たハヌマーンは人間が変化した事に驚きの表情をしており、聖華も何が何だかよく分からないと言った顔をしていた。

「またの名を仮面ライダーアルフォース。お前達を滅ぼす者だ」

優世……いや、アルフォースはマントを翻しながらそう言った。

世界の終わりと愚者の始まり 後編

「仮面ライダー……アルフォース？」

アルフォースの名前を知らないのかハヌマーンはその名前を疑問の声で呟いた。

「生まれたてのお前が知らないのも当然か。ならば知らぬまま消えて貰おう」

アルフォースは左腰に装備されている黒色のサブバイバルナイフの様な武器、ナイフ・ザ・フルを右手に構えると背を低くしてハヌマーンに急接近した。

「むっ！」

ハヌマーンは即座に骨の剣を接近してきたアルフォースに向かって振り下ろした。

「その程度では甘いぞ獣型!!」

「ぐうっ!?!」

しかし、ハヌマーンが振り下ろした骨の剣をアルフォースはナイフ・ザ・フルで滑らせるかの様に受け流し、そのままハヌマーンの腹部を斬り付けた。

「どうした獣型？まだ俺は少しも本気をだしていないぞ」

アルフォースがそう言うもハヌマーンは聞こえていないのか無視してるのか分からないが返事をせず自分の斬られた部分を見ていた。

「傷……最強の俺が傷を負うなど認めぬっ!!」

ハヌマーンはその場で叫び骨の剣を自分の周りで振り回し始めた。

「ふむ……予想通り力タイプは最強廚の考えが多いな」

アルフォースは灰色のマントを全身に巻きつける様になるとハヌマーンに掠る様にナイフ・ザ・フルを投げた。ナイフ・ザ・フルがハヌマーンに掠った後地面に刺さるのを確認すると骨の剣を掠る程度に移動してナイフ・ザ・フルを引き抜いた。

「このマントは結構便利だね。ある程度のダメージなら防げるのだよ。まあ、今のお前に説明をしても無駄だろうがね」

「グオオオオオオオオ!!」

ハヌマーンは雄たけびを上げて骨の剣を振るうもアルフォースはそれを避けつつナイフ・ザ・フルで少しのダメージを何度も何度も与えていった。

少しのダメージとは言え何度も繰り返せば大ダメージにも繋がり数分もするとハヌマーンはかなりのダメージを負っていた。それでもハヌマーンは狂ったかの様に骨の剣を振るっていた。

「グオオオオオ!!」

だが、心なしかハヌマーンの雄たけびは小さくなっていた。

「むっ、後一息だが……念には念を入れて瀕死までダメージを与えておくか」

アルフォースが再度攻撃をしようすると、今まで呆然と見ていた筈の聖華が目の前に立ちただかった。

「聖華……そこをどきたまえ」

「優世。私は今一状況は分かりません。しかし何もここまでする必要は無いですよ？」

「どうやら聖華は先程からアルフォースがやってる攻撃のことを言っている様で優世はそれが分かるかと苛立ち気味になった。」

「聖華。今は君の我儘に付き合ってる暇は無い」

「いいえ。貴方がまだその人を攻撃すると言うなら付き合つて貰います」

「……（困ったな。……そもそも奴等は人間ではないのだが、どう説明したものか）」

優世が内心でどうするか考えていると先程まで骨の剣を振り回していたハヌマーンがいつの間にか聖華の背後に立っていて骨の剣を振り下ろそうとしていた。

「なっ、聖華!!」

「大声を出しても私は引きませんよ……てっ何をするんですか!？」

「ふんっ!!」

それにいち早く気付いたアルフォースは聖華を引つ張つて強引に後ろに下げると振り下ろされた骨の剣をナイフ・ザ・フルで防御するも、武器のリーチの長さから完全

に防御は出来ず浅く斬り付けられた。自分が優世に守られたと分かった聖華は心配そうな表情になった。

「なっ、優世!?!」

「何……心配するな。傷は浅い」

アルフォースは傷の様子を確かめつつ聖華が気負わない様な返事をした。

「やはり俺は最強の生物だなっ!!」

咆哮と共にハヌマーンは動物の脚力で近くの建物の屋上に移動して逃げてしまった。

「……逃げられたか」

アルカナリーダーを腰から外すとアルフォースの姿から黒霊優世に戻り、アルカナリーダーもバックルモードから元の腕輪の形、待機形態に戻った。それを再度腕につけると聖華の方を向いた。

「取り敢えずそこに倒れている男性はマスターに預けるつもりだが……異論は無いな?」

「はい……あの優世。傷は大丈夫なんですか?」

「問題ない。さっきも言ったがそこまで深い傷では無いのでな」

「しかし……!!」

余程心配なのか、自分を庇ったせいと思ってるのか尚も言ってくる聖華に優世は先程戦闘を邪魔された事もあるせいかわ返しをしようと考えた。

「ふむ……そんなに心配ならば直接傷口を見るか？」

「むっ、そうですね。直接見た方が早……直接？」

優世は聖華の返事を聞くとジャックケットを手に持ち着ている黒色のシャツを脱ごうとし始めた。

「んなっ!? なっ、何をしてるんですか貴方は!？」

「直接見ると言ったのは其方ではないか。言った事を違えるのか？」

「そ、それはそうですが。でもそう言うのは……」

聖華が言い淀んでる内に優世は服を腹が見える位まで脱いでいた。

「……………(うわっ、腹筋割れていますね。…………ゆ、優世も意外と体鍛えてるんですね。てっ何故私がいこんなに優世の体について感想を言ってるんですか!?)」

男性経験が無い聖華は顔を真っ赤にして慌てており、優世はいい仕返しになったと思いい服を脱ぐのを止めてジャックケットを羽織った。

「まあ冗談は置いておいて早く男性をマスターに預けるぞ」

「…………へっ、冗談？」

先程までの慌てようは何処へやら、聖華の雰囲気は絶対零度のものに変わっていた。

「冗談……を言うなんて覚悟は出来てますね優世？」

「……悪いが今回は君に何かを言う権利は無い」

「ほう……理由は？」

「君のせいで先程のシャドウに逃げられた」

「シャドウ？」

頭の中に車が通る車道を思い浮かべてる聖華の表情を見た優世はため息混じりに答える。

「それについては……君が住むアパートについたら説明しよう。まずは彼が先決だ」

優世は倒れている男性を背負うと表通りに出て「ワイルド」に向かった。

「ちゃんと後で話して下さいよ優世!!!」

聖華はそう叫ぶと優世の後を追いつけた。

【ワイルド】のマスターに男性を預けた二人はアパートに向かって歩いていく。

「所で優世。私が住むアパートはどういった所なのですか？」

「そうだな……一言で言えば静かだな」

「静かなのですか。それならゆっくりと休めそうですね」

「ワイルド」から徒歩で10分程かかる場所にまだ壁がきれいで部屋数もそれなりにあるアパートがあった。

「これですか？そのアパートと言うのは」

「その通りだ。君の部屋は二階の一番手前の部屋だ」

聖華に部屋の鍵と証明書を渡した。

「……あつ、そう言えばここの住民の皆さんにも挨拶をしないと行けませんね」

「その必要は無いと思うがね」

「何故ですか？」

優世はぼつの悪い顔をして聖華に言った。

「……こここの住民は君と私、そしてマスターだけだからな」

「へー。そうなんですか……てっ三人だけなのですか!？」

聖華を宥めると優世は後で自分の部屋に来るように言うと言分の部屋である一階の101号室に入って行った。それを見終えた聖華は自分の部屋である201号室に向かった。

「ふー。取り敢えず部屋の確認と荷物の整理は出来ましたし優世の部屋に行きますか」

部屋に入った聖華は引越し業者に頼んでおいたダンボールの封を開けて中身を整理した。それが終わると優世が待つ1001号室に手荷物を持って向かった。

聖華がインターホンを押すと直ぐに返事が返ってきた。

「鍵ならすでに開けておいた、好きに入ってくれ」

「分かりました」

鉄製の扉を開けて中に入ると中はこじんまりとしていた。

「入ったのなら奥の部屋に来てくれ」

優世の声が奥から聞こえてきたので聖華は其方の方に靴を脱いで向かった。奥はリビングになっておりテーブルの上には何かの資料が置いてあった。見渡してもリビングには他の家具が無かった。それが気になった聖華が優世に聞いた。

「優世……折角の2LDKの部屋なのに家具はこれだけしか無いのですか？」

「リビングにはテーブルだけあれば問題ないと思うのだが……違うのか？」

「私を知る限りでは男子でも少しは小物などを飾っていますよ」

「ふむ……今回は置いておこう。今回は説明をするだけなのだからな」

優世は手で聖華に座る様に促した。聖華は素直にテーブル近くの椅子に座った。

「まず確認だ。君は今何が知りたい？最低限君が知ってもいい範囲で答えよう」

「そうですね……先程貴方が変身していたあの姿、あの男性から出てきた人、それから貴方が使っていたカードについてですね」

「了解した。まず私が変身していたあの姿は仮面ライダーだ。私が変身したのはアルフォースという名前だがね」

優世はアルカナライダーを腕から外して聖華の見える位置に置いた。

「仮面ライダー？」

「ああ。元々仮面ライダーは財団Xと日本が戦っていた時の仲間の通称だったそうだし」

「どうして優世がそれを知っているのですか？」

「俺の祖父は当時日本政府の科学者をしていたそうだな、その時の事が形見の中に合った日記に書かれていたのだよ」

優世は机の上の資料の中から古い手帳を取り出した。

「これが祖父の手帳だが……君に見せる訳にはいかないな」

「そうですね、流石に形見の日記をおいそれと見るつもりはありませんよ」

「そうか。では次に行こうか」

優世は机の上の資料を見やすいように並べた。資料の多くは先程のハママーンのような生物が写っている物だった。

「まず先程のあれは人ではない。シャドウと呼ばれる存在だ」

「シャドウ？」

「ああ。人のマイナスな感情から生まれたのが奴等だ」

優世は資料の一つを聖華に投げ渡した。それを受け取った聖華は無言で中身を確認した。

「シャドウがいつから出現し始めたのかは俺も知らない。だが、祖父が科学者をしていた頃からいたようだ。日記にこれが作られた理由として書かれていたからな」

アルカナリーダーを指差しながら優世は言った。

「そしてシャドウが生まれた理由であるマイナス感情の多くはどう言う訳かタロットカードの逆位置の意味に当て嵌まるのが多いのだよ」

「ということは先程のシャドウも当て嵌まるのですか？」

タロットカードに詳しく無い聖華は優世に当て嵌まるのか聞いた。聞かれた優世は即座に答えた。

「当然だ。あれは【力】のカードの逆位置から生まれたようだ」

【力】？」

優世の返答が理解できなかったのか聖華はきよとんとした顔になった。それをみた優世は呆れた表情でため息を吐いた。

「……はあ。そこから説明すべきか」

「……面目ありません。タロットとかそういう物には縁が無くて」

罰の悪そうな顔で聖華はお願いした。

「了解した。少し待つていたまえ」

優世は個室に向かった。数分するとペンとノートを持って戻ってきて机に座った。

机に座ると優世はノートにタロットカードの大アルカナを順番に書いていき書き終わると聖華にそのノートを渡して説明を再開する。

「大アルカナは0〜21までの22枚で構成されているのだよ。若い順に愚者、魔術師、女教皇、女帝、皇帝、教皇、恋人、戦車、力、隠者、運命の輪、正義、刑死者、死神、節制、悪魔、塔、星、月、太陽、審判、世界となっている。先程言った【力】はその中で8番目に該当している」

「成る程……取り敢えずは分かりました」

聖華は後で部屋に戻ったら詳しく調べようと思いつながら返事をした。

「なら結構、他に小アルカナというのものもあるが……それは今度話そう。最後は確か……私の使ったカードについてだったか」

優世は腰のカードケースから三枚のカードを取り出すと机の上に並べた。

「これは……？」

「世間でアルカナカードと呼ばれてる物、その試作品として開発されたのがこのカー

ド達だ」

三枚のカードはそれぞれ白と黒で塗りつぶされた物、旅人が描かれた物、黒いロープを纏った老人が描かれていた。

「アルカナカードの試作品……何故そんな物を優世が？」

「祖父の形見の中にあつてな。そこにこのアルカナリーダーも置いて合つたのだよ」

「優世のお祖父さんの形見……ですか。……そういえば試作品は三枚だけなのですか？」

「もつとある……のだが、ね。まあ、教えてもいいか」

まるで恥じるかのように優世はケースから19枚のカードを机の上に置いた。だが、そのカードには肝心の絵が描かれていなかった。

「……え？ゆ、優世。これはどういうことなのでしょうか？」

聞かれた優世はそっぽを向きながら答えた。

「……このアルカナカードは試作品と言つたであろう。それ故カードが使える様にするにはある条件が必要なのだ」

「して、その条件とは？」

「……このアルカナカードと相性の良いものと友人になることだ」

「……要するに優世の友人が少ないから使えるカードが三枚と言う解釈で合つてま

すか？」

優世の発言と使えるカードが三枚と言う状況から優世の人間関係を分かってしまったのかハッキリと聖華は言った。

「そ、それは違うぞ！このアルカナカードと相性のいい人間が中々見つからないのが原因だ!!」

優世の必死な言葉に聖華は一つ試してみようと思った。

「でしたら優世。今貴方の友人は何人いますか？」

「むっ？確か……」

優世は律儀に指で人数を数え始めたがその指は二人目を数えた時点で止まってしまった。それを見てしまった聖華は可愛そうな人を見る目で優世に言った。

「ゆ、優世。私と貴方は友達ですよ!!」

「今更何を言ってるんだ聖華。私と君は昔から友達じゃないか」

「え。ま、まさかその数えた指の片方は……私？」

「……あ」

今頃自分が指で数えてたのに気付いた優世だったが時既に遅し。

二人の間に気まずい空気が出来た。

「ゆ、優世。今日はもう帰らせて貰います、有難う御座いました!!」

限界だった聖華が早口で言うのと優世も何とか言葉を繋いだ。

「……………そうか。今日のこの事は……………忘れてくれ」

「分かりました、では!!」

聖華は急いで玄関から外に出て行った。それを確認し終えた優世は玄関の鍵を閉めると個室に向かい、不貞腐れる様に眠りに入った。

その深夜、ビルの屋上にハヌマーンが立っていた。だが昼間の時と様子が違っていた。

「俺は最強……………最強こそ至高。最強は……………無敵、俺は完璧にして無敵」

それはまるでハヌマーンが出てきた男性が弱いと言っていた時によく似ていた。

「おいおい、こいつはどういうことだ?」

ハヌマーンがぶつぶつと呟いていると突然暗闇から人が現れた。まるで最初からそ

ここに居たかのようなその人物は男性だった。

髪は金髪にしたショート、赤い服を着たその男性は目を瞑っていればホストにも見えただろう。だがその男性の目つきは鋭く、視線だけでも人を殺せそうな迫力をしていった。

「既に壊れちまつてるじゃねえか。たくつ、これだから獣型の雑魚シャドウは宛にならねえんだよ」

「俺を愚弄するか人間風情があああ!!!」

ハヌマーンは雑魚という言葉に反応し、即座に骨の剣を握ると男性に襲い掛かった。

「……ハアツ?」

次の瞬間ハヌマーンは地に伏していた。それを行った男性の背からは青い炎の翼が出現していた。

「がっ!?!」

「この俺を下等生物と一緒にしてんじゃねえよ役にたたねえ層が」

男性はハヌマーンを蹴り上げてハヌマーンの顔を掴んだ。

「どうせだテメエの願望、叶えてやるよ」

「ぐう。き、貴様はい、一体?」

ハヌマーンは辞世の句でも言うかのように男性に聞いた。男性はめんどくさそうに

答えた。

「お前らの上位種、人型シャドウ様だ。覚えておけよ、無能な雑魚シャドウ」

男性は掌から何かをハヌマーンに流し込むとその場から消えた。!!!!

「……。さい、最強最強最強最強いきよううううううううううう」

男性が消えて直ぐにハヌマーンに変化が起きた。突然奇声を発したと思うと体が獅子のような四速歩行に変化し、骨の剣は口と同化してしまった。!!!!

変貌が終わるとハヌマーンは跳躍で何処かに行ってしまった。

「朝か……」

翌日、優世は携帯のアラームで目を覚ました。そしてベッドから起き上がると洗面所に行き顔を洗った。そして服を着替えているとインターホンが鳴った。

「……こんな朝から一体何処の物好きだ？」

優世はそういうも何となく誰かは想像がついていた。玄関を開けるとそこには優世

の想像通り、聖華が立っていた。

「優世、おはようございませす」

「ああ、おはよう。で、今日は何の用かな」

「朝の挨拶ですよ。ついでに朝ごはんでもご馳走しようかと」

「朝ごはんか……で、本音は？」

「朝ごはんをご馳走しますから私もシャドウと戦う仲間に入れて下さい」

聖華は真面目な顔で言った。それを見た優世は難しい顔になった。

「……駄目だ。部外者を巻き込むことはできない」

「おや、では大家さんを巻き込むのはいいのですか？」

「いや、何故君がマスターのことを知ってるんだ？」

「この部屋に来る前に話しまして、その時に教えて頂きました」

「……そうか（マスター、何故余計なことを教えるのだ……）」

このアパートの大家である、「ワイルド」のマスターに怨みの念を送っていると聖華が詰め寄ってきた。

「優世。私の諦めが悪いのは貴方も知っていますよね。それに……友人が戦っているのに自分だけ平和な日常を過ごすのは辛いのですよ？」

聖華は本当に悲しそうな顔で優世に言った。優世はその顔を見るとため息をつきな

がら脱力した。

「全く。君のそう言う所は卑怯だと思うよ、本当に。仕方ないな、私が何を言っても関わるのなら近くで見守った方が安全そうだ」

「という事は……」

「ああ。君にもシャドウとの戦いに関わって貰おう」

「ありがとうございます優世。では、朝ごはんを作りますようか」

「ああ、宜しく頼むよ」

聖華は中に入ると直ぐにキッチンに向かった……が直ぐに優世の所に戻ってきた。

「優世……普段何を食べてました？」

「基本的に冷凍食品かお茶漬だけだ。……何だその顔は」

優世の答えに聖華は何ともいえない気持ちになり、表情に出ていたのか優世に指摘された。聖華は少し間を置くと優世に言った。

「優世。暫く貴方のご飯は私が作ります。いいですね？」

「あ、ああ」

聖華の言葉に込められた迫力に負けた優世は素直に頷いた。

その後、聖華は冷蔵庫の余り物を使って何とかチャーハンを作り優世に食べさせた。

「ふむつ、普通に美味しいなこのチャーハン」

「……それはどういう意味ですか？」

「こういう場合に出された料理は不味くて盛大に吹き出すのが定番だと聞いていたのが……違うようだな」

「それは迷信ですよ。今時の女性ならチャーハン位皆作れますよ……恐らく」

談笑しながら優世はチャーハンを食べた。チャーハンを片付けると優世はゼロカードをアルカナリーダーに翳してバツクルモードに変化させた。

「突然どうしたのですか優世？」

「ああ、そういえば昨日は説明してなかったな。このアルカナカードには変身してなくても使えるカードがあるのだよ」

「成る程。しかし何をするのですか？」

「昨日逃がしたシャドウ、ハヌマーンの搜索だ」

優世はそう言うのとケースから黒いローブを纏った老人が描かれた隠者のアルカナ

カードを取り出してアルカナリーダー上部の窪みにスラッシュした。

『アルカナ・THE・HERMIT・force charge』

するとアルカナリーダーから音声が出た。

「い、今の音は何ですか!?!」

「……昨日も聞いてはいなかったかね? それよりも……早く離れたらどうだ」

「はい? ……つつつ?」

突然の音に驚き優世に抱きついた聖華は優世に指摘されて始めて気付いたのか顔を真っ赤にしながらか離れた。それを見ていた優世は不思議そうな顔をしていたが直ぐに何かに集中し始めた。

「優世、何に集中してるのですか?」

「隠者のカードの正位置の意味には助言という物があつてな。この隠者のアルカナカードにも似た効果があるのだよ。で、今はその助言に集中しているという訳だ」

それから1分位すると優世はアルカナリーダーを待機形態に戻して難しい顔で考え始めた。

「……………」

「ハヌマーンの居場所は分かったのですか?」

「ん。……まあ、一応な」

いきなり黙り込んだ優世に聖華が聞くと余程考えに集中していたのか一呼吸開けてから答えた。

「して、何処に居たのですか？」

「恐らく……町の都心部だろう。助言では大きな建物が多くある所と出たからな」

「都心部!? そんな所にあんなのが現れたら一大事じゃないですか!!」

「一大事……そうだ。聖華、テレビをつけてくれ」

「えっ……分かりました」

突然の優世の発言に驚くもその目から大事な事だと分かりテレビをつけた。

テレビをつけると臨時ニュースが行われていた。その内容は、都心部にあるデパート前で何者かが暴れていて警察が応戦しているが芳しくないという物だった。

「そんなっ、今の警察が押されているんですか!？」

「相性の問題だろうな。シャドウに精神で攻撃するアルカナカードはほぼ意味がない。むしろ鉄砲の様な物理攻撃の方が効くのだよ。さて、無駄話は終わりだ行くぞ」

優世はデパートの名前から場所を把握するとヘルメットを持って玄関に向かった。

「行くって何処にですか？」

「当然、ハヌマーンがいる場所にだ」

部屋を出てきた二人はアパートの駐車場に来ていた。優世は其処に着くと黒いオートバイに鍵を挿した。

「これを被っておきたまえ」

「分かりました」

部屋から持ってきたヘルメットを聖華に渡し自分はバイクに置いてあったヘルメットを被るとバイクに跨った。それを見ると聖華はその後ろに跨った。

「では行くぞ。それなりにスピードを出すつもりだからちゃんと掴まっておくのだぞ」

「言われなくても分かっています」

聖華が自分にしがみつくのを確認すると優世はバイクを発進させて現場に向かった。

「これは……」

二人が現場に着くと何人もの警官が倒れていた。優世はバイクを停めるとハヌマーンを探し始めた。その片手間で聖華に指示を出した。

「聖華。警察の人達の状態を確認してくれ」

「……分かりました」

聖華はあの時アルフォースの邪魔をしたせいで……といった後悔の思いをしながら警官達の状態を調べた。調べた所死んでる人は居なかった。だが、死んでも可笑しくない重症の人も居た。

「優世。取り敢えず死んでる人は居ませんでした。ただ……このままでは死んでしまう人が何人か居ます」

「そうか。ならば聖華は今すぐ病院に連絡をしてくれ」

「優世はどうするのですか？」

「俺は……これの元凶を叩く」

優世はデパートから少し離れた方向に向かってバイクを走らせた。

「グルルルルルル」

優世の向かった先にハヌマーンは変貌した姿で唸っていた。それを見た優世は怪訝そうな顔になった。

「むっ？まだ暴走するには余裕があると思ったのだがね……目測でもミスったか」

優世はアルカナリーダーをバツクルモードに変化させ腰に巻いた。そしてケースから愚者のカードを取り出し

「変身」

フォースチェッカーに愚者のアルカナカードを入れてアルフォースフルフォームに変身した。

「最強ウウウウウ!!!」

「【力】みたいなパワータイプと真っ向から挑むわけがなからう?」

アルフォースの姿を視認したハヌマーンは凄まじい速度で肉薄した。それをアルフォースはナイフ・ザ・フルを腰から引き抜き攻撃を受け流すかの様にかわした。

「グリアアア!!!」

「ぐっ、暴走状態となると相手をするのも一苦勞だな」

かわしたアルフォースにハヌマーンは即座に首を捻り啞えた骨の剣で切り裂いた。

だが、アルフォースもただでは攻撃をくわらず骨の剣を強引にハヌマーンの口から奪

い取った。その際にハヌマーンの歯の何本かが折れてしまった。

「グルルルル?!?!」

「お前はこの世界に間違つて生まれてしまったんだ。その命に罪は無いが……此処でお前は終わりだ」

アルフォースは優しい声音でそう言うと骨の剣を遠くに投げ捨てた。そしてケースから剣の絵が描かれたカードを取り出すとそれをアルカナリーダー上部の窪みにスラッシュした。

『アルカナ・THE・FOOL・sword charge』

アルカナリーダーから音声が流れるとナイフ・ザ・フルを白色のオーラが包んだ。アルフォースはそれでハヌマーンを二度、三度斬り付け上空に蹴り飛ばした。そこに巨大な白い斬撃を放った。それをくらったハヌマーンは上空で爆発した。

「……安らかに眠れハヌマーン」

変身を解いた優世はハヌマーンに黙祷を捧げるとその場を後にして聖華の元に戻り二人でアパートに帰った。

始まりの世代 前編

ハヌマーンとの戦いの翌日、優世は聖華との約束通り朝ごはんを作ってもらいそれを食べていた。メニューの内容は味噌汁と炊いた白米だった。

そんな二人は食事を食べ終わり少しした昼頃に「ワイルド」に来ていた。

「優世、此処に何か用事なのですか？」

優世から何も聞かされずに此処に来たのか、聖華がそんな質問をした。

「ああ。君もシャドウ達と戦うのなら最低限の自衛手段は必要だからな、それを此処で揃える」

「此処でということとは……アルカナカードのことですか？」

「よく分かったな。その通りだ」

聖華はそれを聞き終えると困った顔で優世に言った。

「ゆ、優世？確かシャドウ達にアルカナカードは効き目が薄いと聞いた気がするのですが……他でもない貴方の口から」

「確かにシャドウ達にアルカナカードの効果は殆ど無いと言っているだろう。だが、今欲しいのは緊急時の時の防衛手段であって奴等を倒すのは俺の仕事だ。聖華にはシャ

ドウに襲われた時はアルカナカードを利用して逃げてくれ」

「むっ……確かに正論ですね。分かりました、今回ばかりは従いましょう」

聖華は一瞬拗ねた顔をしたが考えた結果、今回は仕方ないと割り切ることにした。

二人の話が終わるとずっと待っていたのかマスターが二人に話しかけてきた。

「お二人さん、話し終わつたんならとつとこの紙にサインしてくれないか?」

「了解したマスター」

「すみませんマスターさん。急いで書きますね」

二人はマスターが持つてきたアルカナカード所持に必要な書類にサインをするとそれをマスターに渡した。

「よし、少しすれば嬢ちゃんと相性の良いアルカナも分かるから待つてな」

マスターは書類を持つて奥に引つ込んで行つた。

「分かるまで時間が掛かるのですか」

「その様だな。まあ、普通はそんなものだ」

「そうですか。……そうだ。待つてる間暇ですし、タロットについてもっと詳しく教えてくれませんか?」

「それぐらいなら構わんさ。では、今回は小アルカナについて話そうか」

「小アルカナ?」

優世は懐から市販のタロットカードを取り出すとその中から四枚のカードを取り出した。カードにはそれぞれ剣、コイン、杯、杖の絵が描かれていた。

「この四枚の様なカード達の事を小アルカナと言うんだ。今取り出したのはその中でも一番に当たる物だな。この小アルカナもアルカナカードとして製作されている」

「アルカナカードにも小アルカナが……どんな事が出来るんですか？」

「大雑把な内容でよければ説明するが、それでいいか？」

「ええ。それで構いませんよ」

すると優世と聖華は「ワイルド」に置いてあるテーブルの一つに座った。

優世は机に先程の四枚のカードを並べるとその中の一枚を選び説明を始める。

「まずは剣の小アルカナからだ。これは元になったタロットの意味が強さや権威であることから技の発動や必殺技に使用されているな。俺のアルフォースもそれと同じ原理でとどめを決める時はこれを使うことが多いな」

「成る程……つまりこれはRPGで言うところの呪文や特技なんですね」

「その通りだ。では、次に行こうか」

優世は次に剣のカードの隣のコインが描かれたカードを選んだ。

「これは硬貨の小アルカナ。タロットとしての意味は……言うならば目に見える財産だろっな」

「目に見える財産ですか？」

「そうだ。大まかに纏めてしまえば今聖華や俺が着ている服や住んでいるアパートの事だな

アルカナカードの意味では主に耐久増加の付与……タロットの説明と混ぜるのであれば自身の精神体に豪華な鎧を着けると言うことだ」

「分かりました。後の二つは……また今度教えて下さい」

「分かった」

聖華が続きを優世に聞こうとするが奥からマスターが出てくるのを見ると優世にそう言うってマスターの方に向かった。優世も其方に向かつて歩いて行った。

「おう、お前たちか……」

出てきたマスターの顔は何処か気まずそうだった。

「マスター何かあったのか？」

「……そつちの嬢ちゃんのアルカナカード何だがな、エラーが出た」

「エラーだと？そんな事があるのか」

「俺もこんな事は始めてだつての。一応機会の故障かと思つて調べては見たが機械に問題は無かつた」

マスターは頭を申し訳なきように掻きながら聖華に頭を下げた。

「悪いな嬢ちゃん。こつちの落ち度でこんな事になっちまって」

「別に気にしてないからいいですよ」

「そう言ってくると助かる。とは言え何にも渡せないのも尺だ、店の商品で欲しいのがあればプレゼントするが、何かあるか？」

「マスター珍しく気前が良いな。何か良いことでもあつたのか？」

「黒霊、お前は俺を何だと思ってるんだ」

二人が口論をしている中、聖華は店の商品を一通り見て回つた。

「マスターさん、小アルカナの効果って人にも有効ですか？」

「ん？ああ、有効だが精神体に使うのと比べると効力は少ないぞ」

「ありがとうございます。でしたらこの二枚を下さい」

聖華はコインが描かれた物と杯が描かれた物を選んでマスターに渡した。

「分かつた。これならこのまま持つていっていいが袋とかいるか？」

「いえ、大丈夫です」

聖華はその二枚をポケットにしまった。

「ふむ、聖華。アルカナカードを使う時はこれを使い」

優世は聖華に腕輪の様なものを投げ渡した。

「優世、これは？」

「それを付けていればどんな場所でも使いたいと思つた時にアルカナカードを使用できる。但し、外で使う場合は自分の精神力を消費するからな使いすぎれば倒れるから気をつけて使いたまえ」

「分かりました」

聖華はそれを右手に付けた。

「さてと、ではそろそろ帰ろうかね」

「あつ、居た!!!」

「むつ、あれは……」

優世たちがアパートに帰ろうとすると子供の声が聞こえた。その子供は優世とマスターを見つけると若い女性と一緒に走ってきた。

「優世、あの子は知り合いですか？」

「少し違うが……まあ大体はそんな所だ」

聖華は知らない事だがその子供は昨日、アルカナカードを買おうとした少年だった。

少年は優世の所まで来ると子供特有の高い声で話し出した。

「お兄ちゃん!!昨日はありがとう!!」

「何、俺は何もしてないさ。お礼ならマスターに言ってやってくれ」

「なつ、優世、何故俺に振る!？」

「そうだね! おじちゃんありがと!!」

「べ、別に大したことはしてないからお礼はいらん」

少年にお礼を言われたマスターはお礼を言われ慣れてないのか声を詰まらせながら答えた。その会話が終わると少年と一緒に来た少年と同じ茶髪の女性がマスターに声をかけた。

「そんな事はありませんよ。貴方のお陰で私は病気も回復の兆しが出てきましたし、何よりこの子がアルカナカードを買うことも無かったですから」

「むっ、貴女は?」

「あつ、これは失礼しました。私、この子の母親の上坂魔耶です」

「僕は、魔琴つて言うんだよおじちゃん!!!」

「名乗られたからに此方も自己紹介を、この店の店長の空条万影です。他の奴等からはマスターと呼ばれているので其方で呼んで下さっても結構です」

「あら、そうなのですか。でしたらマスターさんと呼ばせて貰いますね」

「ええ」

マスター達が自己紹介している横で聖華と優世はひそひそ話しをしていた。

「(優世、マスターさんの本名って知ってましたか?)」

「一応な。まあ、本人は嫌いなのか滅多に言わないがな」

「(成る程)」

「それで魔耶さん。今回はどの様なご用件で？」

「ええ、お礼もあるのですが今回はちよつと聞きたいことがあります」

「聞きたい事ですか」

「私たちが騙そうとしたあの男性、彼がどうなったか分かりますか？」

マスターはそれを聞くと魔耶の表情を見た。その表情は別に憎んでるというわけでは、単純に警戒している様な物だった。

「彼は私の知り合いの警官が追っていますし何れ捕まると思えますよ」

「そうですか！それなら良かったです」

「ええ……(そういえばあいつからの連絡がまだだが何かあったのか?)」

マスターはいつもこの時間帯に電話してくるはずの警官からの連絡が来ないことを疑問に思っていた。

同時刻、何処かの路地裏を怪しげな白衣を着た中年男性が逃げる様に走っていた。

「畜生がっ、あの警官しつこ過ぎんだろ。こうなったら……」

男性はポケットから拳銃を取り出して壁に身を潜めた。

「旧式の武器でも人を殺せるってことを教えてやるよ」

男性が暫く待っていると逃げてきた方向から人影が歩いてきた。

「死ねやああああ!!!」

男性はその人影の顔を確かめる事無く発砲した。放たれた弾丸は確かに男性に当たった、しかしその男性はその場に平然と立っていた。

「だ、誰だお前!？」

「間違えて発砲したってのに第一声がそれか。中々に屑だな」

男性が撃った人物を確認すると自分を追いかけてきていた人物とは違うことに気付いた。そして撃たれた筈の人影……先日ハヌマーンを暴走させた赤い服の男性は傷口から弾丸を引きずり出した。引きずり出した弾丸をその辺りに捨てると男性に近づき、顔をよく見て言った。

「てめえは皇帝か……だったらこれでいいか」

赤い服の男性は懐から黒い団子を取り出すとそれを強引に男の口に入れた。

「むごっ!？」

「安心しな。まだてめえには生きてて貰わないといけないからなあ。まっ廃人にはなつて貰うが」

少しすると男性に変化が起きた。全身が震えだし、変な汗が出始めると四つんばいで赤ん坊の様に歩き始めた。その男性の影から出てこようとしているシャドウを確認すると赤い服の男性は誰かと話すかの様に喋り始めた。

「皇帝タイプの間人は意志力を無くすのが一番楽だが……よくこんなもんを作る気になつたよなあ」

「あの人にして見ればこれでも甘いそうですよ」

いつの間にかその場所にはもう一つ人影があつた。

その人影は小学生位の背丈で紫色の髪の毛をショートにした女の子だった。但し周囲を回っている赤い目玉が無ければだが。

「隠者あ、居たのは分かつてたが何の用事だ」

「隠者なんて呼び方は好きじゃ無いと言いましたよね、ブレイズ」

ブレイズと呼ばれた男性はケツ、と悪態をつくと前に聞いた名前を思い出し始めた。

「で、さとりい。用件は？」

「其処の廃人からシャドウが生まれたら抜け殻は私に下さい。雑魚の材料とするので」

「抜け殻に用なんかねえよ。好きにしな」

「ええ、そうさせて貰いますよ。……それと間違っても仮面ライダーと勝手に戦わないように」

「ちっ、何回も言わなくても分かったての」

暫くしてシャドウが生まれるとブレイズはそれに命令を下し、さとりは抜け殻である男性を連れ帰った。

「それじゃあ、そろそろ私達は帰りますね」

「おじちゃん、またね!!」

「分かりました。坊主、お母さんに迷惑をかけるなよ」

三人が帰りの挨拶をしていると優世がマスターに言った。

「マスター、俺たちもそろそろ帰るつもりだから二人もついでに送って行こう」

「おう、そうか。なら頼んだぞ」

「任せてくれ」

優世たちは「ワイルド」を出て道路を歩き出した。

「そう言えば、お二人は付き合ってるんですか？」

唐突に魔耶は優世と聖華に二人にそう聞いてきた。

「なっ!？」

「別に付き合っつてはいませんよ。……さて聖華。何故、そこで不機嫌になるのだ？」

「いえ、別に不機嫌なんかじゃ……」

魔耶の質問に聖華は驚き、優世は直ぐに答えた。

それに対して聖華は自分でもよく分からないが不機嫌な気持ちになっていた。

「そうなんですか、私はてつきり付き合っつてるのかと」

「そんな事は断じてありませんよ。……いや、だから何故無言で俺の足を蹴るんだ聖華」

「別に……」

聖華は余計に機嫌を悪くして、優世に八つ当たりしていた。

「あつ、妖精さんだっ!!」

さつきから黙っていた魔琴が突然電柱の上を見てそんな事を言った。

「妖精?魔琴、いきなりどうしたの」

「お母さん、あそこに妖精さんがいるんだよ!!」

言われた魔耶だけでなく聖華と優世の二人も電柱の上を見た。

そこには妖精の様な羽を生やした緑色の服に身を包み、頬にIVと書かれた存在……シヤドウが立っていた。そのシヤドウは腰に挿したレイピアを引き抜くと羽を羽ばたかせて優世達に接近してきた。

「なっ、シヤドウだど!? くっ、聖華はその二人を頼む!!」

「分かりました!」

聖華は二人を守るように前に立った。

優世はアルカナカードを腰に巻きつけた。

「変身!!」

そのままアルフォースに変身すると接近してきたシヤドウのレイピアをナイフ・ザ・フルで防いだ。

「か、カツコイイ!!」

「あれは……一体?」

「あれはアルフォース。簡単に言うると正義の味方って奴ですよ」

アルフォースを始めてみた二人はその姿に各々の感想を抱いた。

「貴様、その数字からいって皇帝タイプのシヤドウだな。俺達は何の用だ」

「我が名はオベロン。君に用は無い、用があるのはその母親だけだ」

オベロンはレイピアの切っ先を魔耶に向けた。

「行かせると思おうか？」

「思わない……から裏技を使う事にするよ」

「何？」

オベロンは周囲を左手で撫でる様に触った。すると触られた空間が自然と小型の妖精の形に変わった。その五体の妖精にオベロンは命令を下した。

「その母親を攫ってくるんだ」

「なっ、させるか!!」

アルフォースは妖精を切り落とそうとナイフ・ザ・フルを振り下ろした。

「させないよ」

しかし、オベロンがそれをレイピアで防御した。その隙に妖精たちは聖華たちの方に行ってしまった。

「あの妖精たちをどうにかしたいなら我を先に倒すんだね」

「くっ!!」

「何か変なのが来ましたね」

やって来た妖精たちを見た聖華は警戒しながら数を数えた。

「数は5匹ですか（5匹相手に守りきるのは厳しいですね。相手は鈍器みたいなものも持ってますし）」

妖精たちは一斉に聖華に鈍器を振り下ろした。

「単調ですね、その程度では私には当たりませんよ」

聖華は護身術の知識を生かして最小限の動きで攻撃をかわした。

「お姉ちゃんもカツコイイ!!」

「ふふ、そう言つて下さるとやる気ができますね」

「あつー！聖華さん後ろです!!」

「っ!!」

聖華が話してる隙に妖精たちは聖華に含み針を放った。聖華はそれを足にくらつてしまいその場に膝をついた。

「くっ、これはまずいですね」

「聖華さん!!」

「お姉ちゃん!?!」

妖精たちは喜んでるかの様にふよふよと飛んでいたが目的を思い出したのか一斉に魔耶に襲い掛かった。

「ぐつ、遠距離攻撃が無いのは辛過ぎるな」

アルフォースはオベロンと交戦していたが苦戦を強いられていた。

「空も飛べないなんて君達は不便だね」

「ふん、喧しいわ」

アルフォースが空を飛べないのも苦戦の原因だが一番の原因は今のアルフォースに遠距離攻撃が無いからだ。

「ほらほら、もう一回行くよ!!」

「ちい!!」

オベロンがレイピアを振るうと其処から炎の球体が幾つも飛んできた。それをアルフォースはナイフ・ザ・フルで斬ったり回避したりしていた。

「くつ、このままではジリ貧過ぎるが……どうしたものか」

魔耶は妖精に襲われた筈だった。

「これは一体……」

「ま、魔琴？」

魔耶に襲い掛かろうとしていた全ての妖精はいつの間にか地面に倒れていた。そして、その中心点には魔琴が震えながら立っていた。

「お、お母さんに手を出すな!!!」

そう言った魔琴の周囲に炎が吹き荒れて倒れていた妖精たちを燃やし尽くした。

それが終わると魔琴は静かにその場に倒れてしまった。

「魔琴!」

魔琴が倒れると魔耶は急いで魔琴に駆け寄った。その横で聖華は自分が見た物について考えていた。

「(さっき魔琴君の頭上に大きなタロットカードがあった気がしましたが……あれは一体?)」